

物

心

心

(承前)

山 田 次 郎

ところで我々は今、或る身體的物的事象の所謂自體をば或る感覺的性質の心的直接態そのものに於いて見ようとし、そこにその感覺的性質の所謂自らを説明する意味に於ける合理性の或る極致を考へたのであるが、その事については、右に述べられた如き生の根本的非合理性との關係如何といふことも關連して、物の存立を元來心的直接態の或る合理化と考へ來つた我々の上來の立場とそれが如何に關係するかといふことが先づ問題となつてくると思はれる。何故といふに、この場合にあつては、物的穿鑿の極所に却つて或る心的直接態を見ようとするのであつて、一見事態が正に逆轉してゐると思はれるからである。

併し乍ら、一體感覺的性質についてそのやうに合理性の或る極致が考へられるといふことは、實は嚴密に云つてそれの個々の單獨態に即してのみ爾云へるのであるに過ぎないことが先づ注意せられなければならぬ。即ち、何らかの感覺的性質は、眞にそれ自身としては生の端的な據點としてあくまで自己説明的であり絶對的であつて、而もその變化に關してはやはり何らか他によるところの説明を求めるのであり(他を含む意識に於いて——他との關係に立つて——それは却つて非合理の極である)、そこに所謂物的に背後の間接的なるもの所謂合理化的な存立理由が存することとなるのである。即ちその事を諄いやうではあるがここにもう一度具體的に追究してみるならば、例へば或る白

の視覚内容について、その性質的に「かくある」こと自體は、もはや何らの説明をも容れぬ絶對的な積極性をもつてゐるのであるけれども、併しそれまでこの視覚内容の無かつた所（他の視覚内容のあつた所）へこの視覚内容が現はれて來たといふことについては、例へば外界的な一枚の紙片の新しき或る位置に於ける存在といふことによつて、或は一層詳しく——云ひ換へれば、右の性質的變化への一層具體的な顧慮に於いて——その紙片に反射する光による眼底から大脳皮質に至る或る神経過程の成立といふことによつて、その所謂説明が與へられると考へられる（即ち、行動的任意的規制の及び得るそれらの物的事象と右の性質的變化との間の恒常的關係が、結局その性質的變化そのものに對する任意的行動的規制の可能の意識に於いて、その或る自己化の意識を成り立たしめるのである）。そこでそのやうな説明的乃至合理化的意義を以て存立する物的事象について、それをどこまでも外界的に穿鑿してゆかうとする立場があり、その事は——この場合特に大脳皮質的神经過程に關して云つて——畢竟白の感覺的性質への關係の密接化（説明の精密化）を將來する事なのであるが、併しこの立場にあつてはどこまで行つてもその關係は結局事態の行動的規制に關する條件的先行の關係であり、この立場に於いて明かになる限りの物的本質は結局行動的體驗を介する感覺的性質間の或る關係としてのそれである以上には出られない。つまり物はそこにあくまで間接的存立者たることを本質として居り、その所謂自體の直接的現前が原理的に云つて不可能である。——といふ事は畢竟、あくまで關係の本質に於いて物を考へるこの追究の立場にとつて、そのやうな關係的事態に關する所謂合理化が窮極的にその光結を拒まれてゐるといふことと同じ事である。唯、このやうに身體を介して物を間接的に考へる立場からの或飛躍的な一轉に於いてのみ、はじめて所謂自體——の知（自體についてはその知とそのものとは或る合一態に於いて

あるのでなければならぬ、知られるものが知と截然と別であつては未だものの眞の自體的現前云ひ換へれば自體の知といふことは嚴密に云つて成り立つてゐないのである——といふに相應はしく絶對的であり端的に現前的である或るものの存立があり、これこそ右の感覺的性質と眞に窮極的に密接し且それをば眞に窮極的な精密度に於いて説明してゐるものでなければならぬのであつて、即ち常の感覺的性質そのものがそれである。——元來心的直接態への或る合理化といふ意味に於いて成り立つ所の外界物の一種(或る身體的事象)に關する經驗的穿鑿の極所に、却つて或る心的直接態が考へられようとする事情は斯の如くである。いかにも所謂自體としてそれを考へると云へば、外界的に物を追究して來た立場がそこにその立場の合理化過程を完結する筈と考へられ従つて合理化の出發點たるものと歸着點たるものとが同じく心的直接態といふこととなつて一種の矛盾のやうにも思はれるが、物をその意味的關係の本質に於いて間接的により外には考へられない立場と、ものの自體的現前といふことはもとと兩立しないのであつて、右の追究の立場に於いて考へられる意味に於ける物、従つて或る心的直接態に關する合理化といふものはそれ自身に於いて當然どこまでも或る可能性の餘地を残さざるを得ないのである。即ち所謂自體としての感覺的性質がそれ自身自らを説明するものとして合理化の或る極致と考へられるといふことは、實は右の立場からは(窮極的に連なり乍ら而も)斷然飛躍的に一轉した立場——謂はば「收斂級數」に對する「極限值」に髣髴する立場——に於いてであるに過ぎないのであつて、通常の合理化過程がそこに成り立つ右の立場の原理的な完結不可能性とそれは決して矛盾するところはないのである(實を云へば極限性は矛盾と非矛盾の調停である)。而も一旦立場がこの所謂極限値的なそれへ一轉した上は、そこに所謂窮極的に合理的たるのは單にその要素的な單獨態に即してのみに限られ、それ

らの變化的な相關の關係に關しては再びここに恰も先きの立場に於いてと同様な所謂物化的合理化の營みが始まらなければならぬのであつて、而もその合理化の過程はそれ自身無限の可能性をもち、物の所謂自體はこの立場に於いて永久に不可到達的である。唯、或る特殊の身體的物的事象に關してのみは、その追究の無限の道程が極限的にかの心的直接態の端的な積極性に連なつて度り、ここにのみ物の所謂自體の現前がはじめて現實的に考へられるのであつて、即ち自らの所謂大脳皮質の神經過程といふものに關してである。

併し以上の考察に於いては、生の所謂心的な直接的内容として、専ら感覺的性質のみが考へられたのである。これは明らかに抽象的であつて、元來空間的に物的な生内容のその空間的物的性格そのものを成り立たしめてゐるものとして當然自らは非空間的であるところの直接的生内容の中には、感覺的(乃至それに準じて感情的)な性質的存在態の外に、それら性質的存在態の間の或る關係を成り立たしめてゐるものとしての意味的(乃至意志的)な形式的作用的一面も亦、含まれてゐるのでなければならぬことは云ふ迄もないのである。即ち、總じて外界的な物の存在が何らかの現實的感覺的性質に於いて他の可能的感覺的性質に關する或る確約の含まれるところにあると考へられる時、それらの現實的な若しくは想像的に非現實的な感覺的性質が單純にそのものとしては明らかに非空間的に心的であるばかりでなく、その間の意味的な指示——即ちそれを一層具體的に云ひ換へて、その現實的感覚に關する或る行動的體驗を條件に或る可能的感覺が必ず現實的になるであらうことに對する一種の(必ずしも明瞭に意識的ではない)確信に即して、その行動的實現への何らかの程度の現實的傾動の存すること——このことがやはり明らかに非空間的に心的であ

るのである。

即ちその意味に於いては、空間的な物の存立は正にその全幅に於いて生の心的な在り方と即してゐるといふことが出来、空間的な物一般についてその何であるかの具體的理解云ひ換へればその「本質」はまさしく心的に成り立つものたるに外ならぬのである。而も物が常にその「本質」に則りその具體的理解に沿うてのみその變化を成す意味に於いては、その所謂「本質」を以て物の「心」とも謂ふことができるわけであつて、例へば素朴に物の重さはその物自身の落下への意志と不可分たるが如きである。併し、かやうに私の身體就中その大脳皮質的神經過程といふものを除く通常の物一般に關して云ふ場合にあつては、その「本質(の理解)」は到底未だその所謂自體でなく(従つて物の變化は必ずしも嚴密にそれに従はない)、その限り單に「考へ(想像し)入れられた」ところの「心」であつて「心」そのものでなく、理解する「心」に對して理解せられるものとしての「物」が、別れて彼方に立つことを免れない。「他人の身體」もこの場合の「物」の例外ではない。「他人の心」をそのままに直知出来るかのやうに云ふのは譬喩でなければ一種の感傷一種の文學趣味に過ぎまい。固より「愛」に於いて限り無くそれが眞の直知に近づくことは誰もが知つてゐるが眞の直知は遂に極限である外ない。その間の「誤解」の餘地こそが生の斷えざる悲劇の有力な根源であると共に却つて生をより大きな悲劇的破綻から救つてゐるものである。

「物」一般乃至「他」一般を知るはその「心」を知ることであり、その知は眞の「自」知との間に抜くべからざる段階的差別をもつ。或る場合「心」の單なる「存在」についてさへもがさうであつて、例へば我々は精巧な人形によつて欺かれるが自分の心の存在についてその事はあり得ない(勿論「自」の底の深さ「他」、「心」性の底なる「物」

性、については又問題が別である)。併し、「精巧な人形」によつて欺かれるのは實は特に「人間的な」心の存在によつてであつて心一般の存在によつてではない。心一般の存在は、知らるべきものとしての物一般の存在と同時にあり同範圍である。何故といふに、知は本性上自知的たることをその理想(目標)としてゐるのであるからである。而してそれが理想である限り、その具體的な規定性に於いてそれは畢竟あくまで想像的であつて現實的でない(この問題に關する議論の歴史に關係させて云へば「類推」的であつて「知覺」的でない——「感情移入」は論理的見地に關する限り「類推」と根本的に異なる何も無いと私には思はれる)。勿論その想像は、例へば「物一般」、「生物」、「植物」、「動物」、「人間」(「彼」汝)といふ風に、特に「愛」を通じて漸次具體性と活氣とを増し、つまり一言で云つて現實的となつてくることは考へられるが、眞に嚴密な意味に於ける「我」の具體的現實性は畢竟その極限である。その限りに於いて知らるべき「もの」が知らうとする營みに對して永久にその彼方に立つ。云ひ換へれば、「物」は所謂志向の對象であつて、志向そのものがそれに對して「心」的であるといふことになる(その所謂志向が時間的に未來に關するものであるといふこと、それが無限的な可能性をもつといふこと、物の知識が根本的に蓋然的であるといふこと、物の自體が一般には——我の大脳皮質的過程を除き——不可到達的であるといふこと、これらの事柄が根本的には同一事態の別の表示であることについては既に述べたのである)。即ち何らかの感覺的性質が他の何らかの感覺的性質について或る約束を含む所に物は成り立つといふ時、物はあくまでその約束を確信されるところの當の或るもの(約束の無限的統合)であつて、その確信そのもののみがそれに對して心的(直知的現實的)である。云ひ換へれば、その確信は未だ——その知が物の自體に到達し得てはじめてさうなるであらうやうに——十分に我としての純一な(客觀をも

含み込む)意志的發動に化し了るまでに至らず、つまり單なる知的確信に止まるものとして、知られるもの(對象)が尙あくまでそれと離れて別にあるのである。即ち、その自知的現實性に於いて心的であるところの知にとつて、知らるべきもの(對象)としてのその(想像的)理想乃至目標は畢竟「他」の「心」(自知的現實態)であり、「他」についてのそのやうな「自體」が、知(「自」)「心」にとつてのその不可到達性乃至課題性に於いて、「物」「他」「對象」であるのである。

知と知らるべきものとの右の關係に明らかなやうに、物と心との二者はあくまで所謂即する關係に於いて立つ。その自知的な現實性に於いて心的である知にとつて、知らるべきものはその自體に於いては當然その同じ意味の心的性格をもつてゐる筈であり乍ら、現實的な知にとつてのその不可到達性に於いて差當り却つて物的(意味的間接的)としてその知の心的(直接現前的)なるに對立し、所謂對象として一種の獨立性を保つと考へられ、而も翻つては物のそのやうな對立と超越とが結局やはりそれへの所謂心的な或る志向を離れて成り立たないのであることが亦あくまで明白な事實であるのである。即ち、何らかの意味的な指示乃至所謂志向の傾動に没する立場に於いてその中に謂はば生を實踐する時、そこに物の所謂超越的に對立的な存在といふものは成り立ち、之に反してそのやうな志向の直接的な生が方向の歪き一轉に於いて却つて自己自身に向ふ時、そこに右の外界的に超越的な物的對象に代へて、特に所謂心理學的對象たる意味に於ける或る心的内容の存立があると考へられる。而して前の立場に於いて立場そのものが忘れられる時物は絶對化され、後の立場に於いて立場そのものが忘れられる時世界は表象の浮動となる。何れも眞實であ

つて單獨には抽象的である（眞實でない）のである。かくて所謂即するところの二つの立場は畢竟志向的な直接の生に
ついで反省的に連なるところの二つの立場であることが明らかなのである。

我々は上に感覺的性質の内容について、その心的直接態が所謂大脳皮質的物的過程との或る密接な關係に於いて立
つことを考へたが、實はそれら感覺的性質間の意味的乃至志向的な所謂約束的關係といふ如きものが一種の心的生内
容としてはやはりその大脳皮質的物的過程との同じ密接な關係に於いて立つのであつて、その關係的心的内容とい
ふのは要するにそれら感覺的性質の相異態に互る或る「識」であると共にその間の傾動に關しては同時に或る「意」た
るものであるが、かやうなものの心的な時間的經過が大脳皮質的物的過程に對して或る恒常的な被制約的呼應性をも
つと考へられ、そこにその制約的物的過程への可能的（間接的）行動的規制が任意にその制約關係を反覆實現し得ると
考へられる時、その物的過程はその心的過程に對してそれを所謂説明する役割をもつものとなる。——そこでこの點
に關して注意せらるべきことは、そのやうに所謂生理學的な物的基礎の想定に於いて考へられる限りに於ける心理學
的事實といふものが一般に右に述べた如く實は眞に直接的な生の實踐からは反省的に全く一轉した立場に於いてはじ
めて成り立つものであるといふことである。

それであるから實際我々の上來考察した所もあくまで反省的凝視に堪へる意味に於ける一種の存在的生内容として
の感覺的性質についてであつたのである。即ちそのやうな感覺的性質について——或る大脳皮質的過程としてのそれ
の所謂物的基礎が考へられ、それが生理學的に外界の經驗の對象である限り、それと右の感覺的性質との相應は畢竟
或る時間的制約の關係に於けるそれである外なく、而もその外界的物的存立自體すでに或る感覺的性質を豫想しそれ

の所謂「彼方」なる或るものである意味に於いては、右の感覺的性質とそれとの關係は未だ眞に直接的なものといふことが出來ず、唯それのその様な外界の經驗的把握を超える所謂自體についてのみ眞の直接性は考へられるが、かやうな窮極的境地は外界の經驗的把握の立場に沿うては追究の無限の彼方なるものとしてあくまで唯想像的な間接態に於いてある外ないものであり、而も事實上私の身體といふものについては、その所謂想像的間接態とそれに對する現實的直接態との間の關係でもあるところの或る窮極的な（即ち合理性の原理たる自覺が據つて立ち従つてそれ自身到底合理化し切れないところのかの反省の）飛躍を介して、その外界的物的經驗の立場がつまり所謂極限的に（それで、ありそれだけでなく、離れつつ即いて）右の感覺的性質の心的現前態と連なつてゐるのであつて、經驗的外界物の本來經驗を超えるところの（即ちそのものでありそのものでない所の、極限的に連なるところの）所謂自體についてまでその外界性の考へられなければならぬ理由といふものが無い上に、右の感覺的性質そのものの端的な自己説明的性格、云ひ換へれば知識の當體性といふべきものがその事と併せ考へられて、實はこのものこそ正にその所謂自體に相當するものなのであるといふ考へが成り立つたのであつたが、——今反省的に一種の心的生内容として捉へられる限りに於ける所謂意味的乃至意志的な作用の一面についても亦、右と同様その生理學的物的基礎が考へられ、而もその物の基礎の外界的存立自體すでに或る意味的作用による所謂「彼方」なる對象である意味に於いてそれは決してそのまま意味的作用の所謂「此方」なる眞に直接的な物的存立者とは考へることが出來ず、結局當の意味的作用そのものこそ實はそれと眞に直接的なる筈のものとしての所謂物的基礎の自體に相當するものなのであると考へられるに至る事情も亦、あくまで右と同様である。——實際何らかの感覺的性質がそのものとして端的に自己を説明してゐるやう

に、何らかの知識的乃至意欲的な作用乃至機能といふものも亦そのものとして端的に自己を説明してゐるものである。否、贅を云へば何らかの感覺的乃至感情的な性質に即してそこに没入するといふことと、何らかの直接的な作用的傾動といふことは、もともと不可分なのであつて、事情の共通するのに不思議は無いのである。云ひ換へれば、我斯く感受し斯く意欲し斯く作爲するといふことは、その立場に即してはあくまでも明白に謂はば極めてよく解つてゐる事柄である。元來合理化といふことは形式的に自己化といふことであつて、自己意識の存立が説明の極致である。自己について知識ははじめて當體的であり、所謂自體(の知)がそこにはじめて現實的である。云ひ換へれば、生のおらゆる端的な據點乃至出發點としての心的直接態の各々について、そこにこそ正に合理化の極致があると云ふことが出来るのである。

而もそのやうに所謂端的な據點たり出發點たるものは、眞にその中に没し切れれば切る程自我的(合理的)である反面に、それを反省的に間接化し對象化すればする程却つて非我的に、端的な「ある」の意識から「かくある」の差別性の意識に向つて、つまり他との關係を含んで、その時間的な變化(他の可能との關係に於ける積極的存立)に關する非合理感(自らに由らず他に由る意識)を生じつつ、所謂説明を求めてくるのであつて、かやうな反省を何らかの程度に豫想してのみ生内容の或るものに關する所謂心的性格云ひ換へれば所謂心理學的事實といふものは成り立つてくるのである。即ちそのやうな反省の間接化以前の生の眞の直接態には嚴密に云つて未だ物心の差別は無く、却つてそれこそが物心の差別を成り立たしめてゐる當のものである。云ひ換へればそれは、反省的に謂はば平板的な事實の世界に對して一層直接的に謂はば與行的な評價(意欲、當爲)の世界であつて、心理學的立場に對して云ふならば論

理學的立場といふべきものである。そのやうな所謂價値的にして妥當的な謂はば生きた立場といふべきものに於ける何らかの傾動に即してのみ眞の自我の意識はあり、云ひ換へれば自由の意識はある。一體自我の意識とは端的な立場の意識であつて、つまり端的な始發の意識であるのである。而して自由の意識は即ち自由の存在であつて、このやうな意識と存在との合致が即ち自由の本質である。而してこのやうな明白の極致なる窮極の直接的立場から出て所謂反省的間接化に於ける自我的から非我的へ、價値的から事實的へ、傾動に即する「ある」から固定的な「かくある」へ、の方向に沿うて所謂説明を求める非合理性への移行があり、所謂生理學的基礎(説明原理)の想定の上に立つものとしての心理學的事實なるものやはりこの方向に沿うてはじめてその成立が考へられるのである。

即ちその(合理性から非合理性へ)の移行段階を大雑把に云つて、作用的、感情的、感覺的(表象的)、といふ風に考へられ、後なるもの程實際心理學的に扱ひ易く、それにとつて謂はば本領的であるのである。つまり心理學的處理の對象としての反省的な固定乃至存在化が後なるものについて程比較的安定的であり、従つてその間の法則的關係を分析して行く上に比較的便宜が多いのである。

元來心理學といふものは差當り最も狹義に意識的乃至心的體驗の學として生の直接的時間的事實に關する記述であると共にやがてその説明たることを意圖するのであるが、このやうな科學的處理の可能なるためには先づ生の眞に直接的な實踐の立場が一轉して自らを反省的に、つまり時間的並列的に、所謂心的存在化しなければならぬのである意味に於いて、眞に直接的な所謂生きた(定立的)作用の一面は決してそのまま心理學の中に含み込まれることなく、實

は却つて心理學が常にそれに據つて立つてゐる所のものなのである。従つてその所謂説明についても、それがあくまで反省的に時間の上に謂はば「薙ぎ倒さ」れる限りの（存在的な）心的生内容にのみ關はるとき所謂自然科学的に因果的な説明の見地は始めて眞に徹底すると考へられ、何らかの意味的志向的な生（斷片）そのものを單に時間的な條件性の關係の一項たらしめる意味に於ける存在化に徹することなく謂はば生の（論理性の）ままにその内容とすることは立場の混淆と考へられるが（概念判斷推理等に關する嚴密な心理學的敘述の困難）、而もその際そのやうな時間的並置的な存在化に於いて個々の項的内容のそれ自身としての端的な絶對性乃至自主性といふべきものは暗にその反面に既に承認され豫想されてゐるのである（所謂「創造的綜合」の考へにその事はよく現はれてゐると思はれる）。

即ちもう一度繰返せば、感覺的乃至感情的な性質にせよ意味的乃至意志的なはたらきにせよ、それ自身としての端的な所謂生きた存立にあつては、それらは元來互に不可分であるがままに絶對的であり自主的であり自己説明的であつて「否、物こそ絶對的である」と考へる時のその考へそのものもやはりその一例であつて、端的に自己に據つて立つてゐる。勿論論理的「根據」といふこともあるけれどもそれは所謂「自己」と別なものではなく、論理的「説明」は自同律に基いてゐるのである、唯それが反省的な固定（「死」）に於いて他の同様な存在的内容との關係に並置せられるのみ、その間の時間的な生起乃至變化の關係についてはじめて別に何らか他によるところの説明が求められてくることとなる——その反省的並置や説明の要求乃至提示に於いて再び或る直接の生が端的に自己に據つて立ち乍ら（その意味に於いて論理的説明は或る絶對的な底をもち、論理性の一内容としての因果的説明にはそれが缺け横にいくらかでも延びる、といふことができる）。

さてその説明の或るものは先づ自然的に所謂外界の存在の考へによつて果たされるのであるが、併しそれは高々何らかの行動的意欲と關係的な抽象的同一性に於いて考へられる限りに於ける感覺的性質間の或る時間的關係に關するのであるに過ぎず（心理學的生理學的反省以前）、一層具體的に仔細な陰翳の規定をも含めて考慮せられる心的内容の變化に關しては結局身體内部的な所謂生理的物的事象就中大腦皮質的過程といふものが考へられ、一般の自然的外界物はこの身體内部的過程を所謂刺戟的に規定する意味に於ける間接性に於いてのみその存在が考へられることとなる。而も、通常の所謂外界物に比してはその關係が一層直接的であり精密であるとは云へ、實際に經驗の對象たるものとしての大脳過程はあくまでやはり一種の外界的過程である限りに於いて心的内容そのものへの根本的な間接性を脱して居らず（心的内容の「彼方」なるものであつて「此方」なるものでない）、従つてそれに對する可能的な外界的規制を通じて所謂説明せられるところの心的内容も當然その外界的規制の（行動と關係的な）事象的抽象性に應ずる程度の變化であり生起である以上に出ることが出來ず、特に不安定な作用的一面をも含めて眞に具體的に考慮せられる限りの心的生内容の變化に關しては、結局その心的生内容そのものについて所謂心理學的（内省的）に觀察される所の何らかの法則性の（形式的普遍性の安定的に自己的な）立場からしてその説明がなされる外ないことになる。即ち直接現前の心的「現象」に對して「實在」的基底的に考へられる意味に於ける所謂「心」がそれである。而もそれは「心」とは云ふものの、生の心的直接態に關する法則性の或る集約として、實はかの合理化に即する物化なるもの一種がそこに考へられるに過ぎないのである（「物」の形式的本質は既に述べたやうに法則的安定性にあり、「世の中はかくかくのものだ」といふやうな場合の「もの」にその事がよく現はれてゐるのである）。唯この場合に於ける

「もの」は、自然的に素材に考へられる一般の外界物や、更に生理學的乃至心理學的反省がそこに加はつての所謂大脳皮質といふ如きそれに比べて、その所謂物化的に合理化する所が更に一段と生の直接的具體相に迫つてゐるといふ差別の存するに過ぎないのである（生が更に心的自然としての心理學的存在化の抽象性を脱する眞の歴史的具體性に於いて考慮せられる場合に於ける「もの」は、例へば「惡魔」であり「神」であり「運命」である）——而してその事と關聯して右の前二者に於いて統合せられる法則性が行動的體驗を條件的に含むことによる外界性をもつてゐるのに對してこの場合の「心」としての「もの」についてその事の無いといふ事情の存するに過ぎないのである。つまりそれは云ひ換へれば、もはや現實に外界的行動的處理の對象とはなり得ないやうな眞の所謂自體的奧底について想像せられる限りに於ける所謂神經過程の別名であるに過ぎないと云つてよいのである。

かくて要するに心理學は、生の心的直接態について、その間の恒常的な、自然的に反覆的な、法則性を見出さうとして居り、而してその法則性のもつ一種の安定性は、結局大脳皮質的過程の物的性格といふものと結びつけられてゐるのである。勿論この特種の身體内部的過程に關する所謂生理學的追求は、外界的行動的穿鑿として免れ難い或る粗笨さをもつて居り（物的自然科學一般の、生の合理化段階に於ける低位性乃至基底性）、従つて生の具體的な心的直接態に眞に應じ得るだけの綿密な規定性からは現實的に遙かに遠く、そこに心理學が自己の立場に獨特な所謂（實在的）「心」とか或は「無意識」とかいふ如きものの想定を必要とするに至る所以があるのであるが、併しそれらは原理的に云つてあくまで補助的な中介概念といふべきものたるに止まると考へられ、結局生の心的直接態の底には理

想的に云つてそれと嚴密に相應する筈の或る生理的物的事象の存立が考へられてゐるといふのが否定できない自然(科學)的傾向であると云つてよいのである。

而して何らかの生理的物的事象とのそのやうな(理想的)相應性が考へられるといふことは、——畢竟空間的物的事象一般に通ずる所謂因果的規定性(實體的保存性と即する變化の補償性)の考へに即して、——實は生の心的な在り方に關する所謂決定性が考へられるといふことに外ならぬのである。然るに、何らかの物的事象とのそのやうな相應性の(理想的に)考へられる心理學的事象といふものは、決して單にそれだけで生を全的に覆ひ得るものではないのであつて、心理學的内容の存立は少くもその反面に當る心理學的反省そのものの立場なる一層直接的な生の自主的絶對的存立を缺くことが出來ないのであり、畢竟同じ事であるが、心理學的内容の各、について眞にその中に没入する「生きた」(時間的存在的並置態を脱する)「今」の立場の何れもが夫々端的に自發的であり自由である、といふことについては既に述べた通りである(心理學が印象觀念或は感情といふ如き存在的内容の單に自然的な離合といふもの外に必ず例へば注意といふ如きものに於ける或る能働的非存在的契機の必要を感じてを考慮せよ)。

而も又、そのやうにあくまで端的に自發的な絶對的立場の何れもが夫々心理學的反省の對象としては再び却つて相對的依他的に見られ得るのであり、その限りやはり右の如く何らかの身體的物的事象との(理想的)相應性に於いてその所謂因果的決定性が考へられるといふことを免れないのである。勿論そのやうな決定性の現實的な一義的確定といふことは、形式的に云つてその一義的限定乃至確定的把握そのものの立場があくまでその外に立つ意味に於いて矛盾的であり不可能であると云へるのであるが、而もその事(現實的不可能性)はそのやうにあくまで決定性の外に立た

うとする直接的立場をも畢竟理想的に含めての心的な生の全體に亘る物的決定性が考へられるといふことの可能を決して排除するものではないといふ風に考へられる。——實を云へば、一方眞の直接的立場についてあくまで絶對的な自發性が考へられ、而も他方それらの立場の何れもが刻々反省的に却つて依他的な被規定性に於いて考へられる、といふこの矛盾的事態こそが、所謂決定性の「理想的に」考へられるといふことと正に等價的であり、云ひ換へればその具體的意味であるのである。

そこで右の事情を、上來の一異様な考へ、即ち何らかの空間的事象の所謂自體として却つて何らかの心的に非空間的な生の直接態を考へようとする立場と關聯させるとどういふことになるかといふに、それはかうである。

元來心的な生の全體を所謂理想(理念)的に覆うて大脳皮質的過程といふ一種の物的事象の因果的經過が考へられる時、その一種の物的事象が實際それに於いて經驗され若しくは想像されるところの外界的形式といふものは、もともとの直接的な性質的現前態に關する可能的行動的體驗の或る意味的な組織に於いて成り立つものとして、何らかの現實的乃至想像的な性質的現前存在とそれに足場をもつ何らかの意味的作用とを介してそれらの所謂「彼方」なる意味に於けるその物自身の(生の場に於ける)間接性を意味するものであり、従つてその物的事象は決してその外界的形式のまま生の心的直接態とそれの所謂「此方」なる意味に於ける眞の直接性に於いて立つものとは考へることが出來ず、唯それのそのやうな外界的形式を超えたる所謂自體についてのみそれが考へられるが、さてその自體といふものは云ふまでもなく外界的經驗的追究にとつては無限の彼方なるものであり、而して外界的經驗的規定に於けるその確立がそのやうにして窮極的に拒まれてゐるといふことは、畢竟外界的經驗的規定に於いて立つものとしての物的事象

について一般に支配的と考へられてゐるところのかの因果律がそれについては直ちに適用出来ないといふことでなければならぬのである。而も他面に於いて、その大脳皮質的過程といふ一種の外界的物的事象の所謂自體に相當するものとして——即ちその物的事象に關する外界的經驗的追究の極限に位置して——何らかの心的に非空間的な生の直接態が或は現實に經驗され或は少くも想像されるのである。その際、心的に非空間的であるものを以てともかくも一種の空間的物的事象である所のものの自體としては考へ難いといふことは、畢竟物の自體といふものの原理的な超經驗性と空間的規定一般の原理的な經驗性といふものとに尙十分思ひが徹してゐないからであり、何らかの心的非空間的者が外界的形式に於ける大脳皮質に對して直ちにそれでないことは、この物の自體が直ちにそれでないことと少しも異ならないのである。而もそのやうに考へてみてもやはり、何らかの生の心的直接態と或る大脳皮質的物的過程の所謂自體との間には、たとひ兩者が同一窮極所に合致することは否み難いにせよ、そこにそれらは所謂即する關係に於いて立つものとして、一方心他方物としての區別があくまで考へ保たれようとするといふことは、畢竟物といふものの考へがあくまで空間性といふその經驗的本質の餘影の纏綿から自然的に免れ難いといふことであり、實を云へばそのやうな經驗性を原理的に超え而もやはりそのやうな様式に經驗せられるものと全く別のものではないといふ一種の矛盾的事態にこそともと物の所謂自體の「極限」的性格といふものは成り立つてゐるのである。云ひ換へれば、物は究極的に心であるといふこととやはりそれは心とは別であるといふことは（物と心と所謂即するといふことは）、物の自體が心であるといふことの中に實は含まれてゐるのであり、それと全く等價的であるのである。

而してその意味に於いて或る大脳皮質的物的過程の自體として考へられる何らかの生の心的直接態が、眞にそのも

のとしての立場に於いて端的な自我性云ひ換へれば自由性をもつてゐることは上述の通りであり、大脳皮質的物的過程に關する外界の追究がその經驗的立場からしてはそれの所謂自體をば無限の彼方に考へなければならず、従つてその窮極的境地への因果律の適用を當然少くも差當り躊躇しなければならぬといふことは、畢竟その自我性乃至自由性の積極的體驗の單なる消極的裏面であるに過ぎないと考へられるのである（一般に物の所謂微視的境地が因果律の數學的嚴密性に對して反逆的であるといふ今や周知の顯著な事實がここに聯想せらるべきである）。

そこで殘る最後の（と思はれる）問題は——生の心的直接態の個々の要素に即しては、成る程そこに端的な積極性があり自己説明があつて、所謂自體（の知）といふに相應はしいものがあるのに相違ないけれども、その間の變化的な相關に關しては却つて何らか他による説明が求められ、そこに例へば先づ外界的な物の存在の如きものが考へられてくる——といふ上述の事態に關聯するのである。即ち、そのやうに一體生の心的直接態が、その所謂合理的な自體性に關して決して自足的でない——云ひ換へれば、その自體性が斷片的であつて全體的でない——といふことについては、そのやうな生の心的直接態をもつてその自體とする考へられる大脳皮質といふものが、實は外界的物的世界中なる極めて微小な一部分であるに過ぎないといふ事實が、外界的物的經驗の立場からしてそれに對應してゐるといふことが考へられるのである。即ち、端的に生を以てそこに没入してはあくまで自我的であり自由的であり自己説明的である心的内容が、反省的に時間の上に存在化されては却つて依他的な被規定性に於いて説明を求めつつ立つといふことは、畢竟外界的物的經驗の側から云つて、それらの心的内容をその自體とする大脳皮質的過程といふものが、

外界的物的世界の爾餘の大部分との間の所謂因果的な規制關係といふものの中に組み入れられて立つてゐるといふことであると考へられるのである（従つて、生の直接態が、實は嚴密に云つて、それを全く時間的内容に存在化し切ることが出来ないといふ事實に對して、やはり外界の經驗の立場から云つて大脳皮質的物的過程の所謂徹視的境地が必ずや因果律の嚴密な適用を拒むであらうといふ事柄が對應してゐるのであることについては、既に前節に述べた通りである）。云ひ換へれば、生の心的な直接的世界に於いて、私の身體就中大脳皮質といふ一種の物の——或は感覺的性質とし或は意味的作用としての——自體的現前に即して、この物へ外界的に因果的影響をもつものとしての他の諸物一般（他の身體をも含む）の單なる現象態——即ちその自體（心）の非現前的間接態（想像、確信）——が存するのである。即ちその事を逆に云つて、廣くものの自體的現前が——實は特に「私の」大脳皮質についてのみそれは事實上眞に現實的であるに止まるが——即ち心的な生であり、ものの自體（心的な生）の單なる間接態（想像的乃至意味的な非現實態）が即ち生の物的内容一般であつて、或る自體の心的な生に於ける積極的連続性（自我的合理性）の破れる所に他の自體の積極的進出（侵入）としての物の存立があるのである。かくて生に於ける物心兩面の間の關係は畢竟異なつた私（現實的）と私（想像的）との——或は同一の私に於ける眞の現實性の地盤をあくまで離れずに云へば、それに於ける或る直接態と間接態乃至一つの瞬間と続く瞬間との——つまり形式的に云つて廣く生の反省的一轉の、あくまで根本的な斷絶的連續の關係であつて、その間の特定の對應性はもはや説明することの出来ない絶對的事實（神の作為）と云ふより外なものである。（J）